

朗 読 文

植物が生やすトゲには、色々なタイプのもがある。由来からそれを見てみると、成長の止まった枝の先が硬化して尖ったもの、茎や葉の表皮に生えた毛がトゲになったもの、葉が変形してできたものなどに大きく分けることができる。葉が変形したものの中には、周囲の鋸歯のこぎりばの先が尖ってトゲになったもの、葉の中脈の組織が硬化してそのまま残ったもの、緑色の葉の全体が硬くなり、先が鋭く尖ってトゲの形になったものなどがある。また蕾つぼみの時に花を包んでいる苞葉ほうようやガク、キク科の総苞片そうほうへんといわれる部分も、葉と同じようにその一部や全体がよくトゲに変形する。

トゲのある草や低木は乾燥地帯に多い。中でも古くから家畜が放牧され、草地在こうはいが荒廃した場所には特に多い。私が訪ねたパキスタン北部のインダス川が流れるバルチスタンの谷は、まさにその典型的な例だった。

バルチスタンの谷では、地面にへばりついた小さい草や有毒植物をのぞいて、山の斜面にまばらに生えている植物のほとんどが、さまざまタイプのトゲを装備していた。その中で見た目にもっとも刺々しく感じたのは、キク科のヒゴタイの一種だった。

このヒゴタイはタンポポのように裂けた葉を持ち、その破片の先から爪楊枝の太さの恐ろしいトゲが長さ二センチにも伸びている。もっと恐ろしいのは、白い花が放射状に集まった直系八センチほどの球形の花穂かほだった。それぞれの白い花は数枚の総苞片に包まれていて、そのうちの二〜三枚は、葉に生えたものより強力なトゲに変化していた。ヒゴタイの花穂は花が開くとピンポンのような白い玉になる。それぞれの白い花びらの先が四裂して反り返ると、総苞片のトゲは花びらに隠れて見えなくなる。柔らかそうな白い玉をうっかり手でつかもうとすると、手のひらや指に木質の鋭いトゲの先がぐさりと突き刺さり、血を流すはめになる。

それにひきかえ、バラの枝に生える三角形のトゲは、家畜の食害を防ぐのにほとんど役に立っていない。この谷のヤギやヒツジは、バラの茂みに前足を掛けて背伸びし、ピンク色の美しい花や葉をうまそうにむさぼり食っていた。